

グスタフ・ストランドル

Intervju med Mr. Gustav Strandell,
CEO of Maihama-Club Co., Ltd.

スウェーデンと聞いてイメージするものの中に、「高福祉」や「充実した医療保障」など、社会福祉制度が整っているとイメージされる方は少なくないと思います。スウェーデンの福祉制度はいわゆる「ノルディックモデル」と呼ばれ、高負担高福祉の制度として知られています。

そのスウェーデンでの老人介護の現場はどのようになっているのでしょうか？今日本に、スウェーデンの方が経営している有料老人ホームがあることはご存知でしょうか？

その名は「舞浜倶楽部」。充実したケアシステムと、看取りまでを行うこの企業の社長、グスタフ・ストランドル氏にインタビューをすることができました。



舞浜倶楽部

SCF 職員（以下「-」）新型コロナウイルスの影響もある中貴重な時間を割いていただき、ありがとうございます。（ストランドル社長）こちらこそ、よろしくお願ひいたします。スウェーデンヒルズも行ってみたいところで、コロナが落ち着いたら1度行きたいと思います。—ぜひお越しください！いろいろな場所にご案内させていただきますれば光栄です。

それでは、ストランドル社長のご経歴や舞浜倶楽部について、教えていただけますでしょうか？

そうですね、まず私が最初に日本に来たのは1992年でした。その時は高校の交換留学ということで東京に行きましたが、交換留学の後もう1度日本に遊びに行き、1997年に当時の北海道東海大学に留学したんです。2回スウェーデンと日本を行ったり来たりしたのですが、半年くらいは北海道にいました。スウェーデン交流センターも関わりの深い、川崎一彦先生…今はストックホルムに住んでいらっしゃるんですが…にすごくお世話になりました。

—そうだったのですね。川崎先生には今も当センターの評議員を務めていただいております。私自身も色々とお世話になっております。

1997年に北海道東海大学に留学した時に、1つのスピーチ・コンテストがありまして、それに優勝したんですけども、実はその時の様子が北海道スウェーデン協会の機関誌に載っているんですよ。それが23年前のことだったのですが、それを昨日思い出したんですよ（笑）

—そうだったのですね！ぜひ当時の記事を拝見したいと思います！

どこかにコピーがありましたから、探しておきますよ。ともあれ、懐かしい思い出ですね。



97年留学時のようす

そして、北海道東海大学に留学したことで人生が変わりましたね。それは川崎先生のおかげでもあるのですが、北海道の老人ホームを2～3カ所ほど見学する機会に恵まれました。その時にはすでに「福祉の分野で働きたい」という思いはありましたが、日本の介護現場を見ていく中で、自分の中でやりたいことというものがそれですぐに固まりました。そこから舞浜倶楽部も含めてこの23年間つながっています。なので、ここまで続けてきたことは本当に嬉しいことです。

そんな中でちょっと衝撃的でもあったのですが、介護保険制度が整う前の日本でもそうでしたが、見学した現場も、どちらかと言うと古い昔ながらの、暗い介護現場だったんですね。多くの方が寝たきりで、しかも地域から離れた生活を皆さんしていらしたんです。でもそれはその施設が悪いのではなくて、20～30年前の日本の介護施設の現場というのはほとんどがそうだったんです。スウェーデンも、私の祖父母が入所する時代には既に変ったのですが、曾祖父母の時代には、みんな老人ホームというものを怖がっていました。死んでも入りたくない場所だ。

今では昔と比べても大きく変わりましたが、当時私が北海道や、そのあと全国で見た介護現場はちょっと前ならばスウェーデンにもあったような、旧態依然とした現場でした。それから今に至るまで…20年かけて350カ所ほどでしょうか、世界8か国の介護現場を見学してきています。

スウェーデンだけでなく、韓国、中国、シンガポール、ドイツ、アメリカなども…多くの国を回り、介護現場を見てきましたが、やはりどの国も介護現場は暗いですね。不思議なことにその国々の文化などに関係なく、どこも皆似たようなことをしてしまうんですね。地域から離れて、日常生活を送ることが不可能な場所で、結果として寝たきりになってしまうというケアが残念ながら普通だったんです。ですが、今の日本の先駆的な介護現場ではそんなことはなく、地域の中にあり、地域との交流があり、ご家族の方も喜んでくれて、頻繁に会いに来てくれる。入所されている方が難しい病気になってしまったとしても、どちらかという普通の生活を送っているのが今の日本です。私が最初に介護現場を見学していた頃はそんな介護現場がなかった、というよりもそういうことをすることが不可能だったんです。この20～30年で最高に、良い意味で日本は変わったんですね。

どうやって変わったのかというと、非常に大きなきっかけとなったのが、90年代に10万人くらいの日本の方がスウェーデンとデンマークの介護現場などを見学されました。当時のスウェーデンとデンマークは90年代の日本とはまったく違うことをやっています、特に認知症の方は精神病院には入っていないんですよ。しかし当時の日本では基本的に認知症の方は精神病院扱いされていたんですね。あるいは介護施設って言うのは精神病院とそっくりだと思われていたんです。なので、多くの日本の方は、スウェーデンやデンマークの取り組みを見て、「なるほど、日本は変わらなければいけない」とお感じになったはずです。ただ、日本はスウェーデンやデンマークと同じことをすれば良いのではなく、日本バージョン…日本の実情に応じてアレンジして行われていく必要がある、という認識が見学されていた方たちにはありました。その流れは私が北海道東海大学に居た頃から始まっていたんです。ですので、非常にいいタイミングで私はこの業界に入ることができたと思います。

それだけ日本の、とりわけ北海道はすごかったですよ。北海道のグループホーム…社会福祉法人は日本の中でもものすごく先進的な取り組みや、新しいモデルを試していたんです。それは例えば、函館の林崎さんという方が経営しているらっしゃるグループホーム「あいの里（函館光智会 理事長 林崎光弘氏）」や、洞爺湖にある、大久保幸積さんという方が経営しているらっしゃる大きな社会福祉法人「幸清会（理事長 大久保幸積氏）」など…こういった福祉の分野をリードする方々がスウェーデンやデンマークを見て日本に独自のバージョンを作ったんです。私がこの業界に入ったのはそんな頃でして、タイミング的にちょうど良い時期だったんです。すごく面白い、変化の時期だったんです。

それに加え東京のスウェーデン大使館では、そういった交流がより深まっていくようにと、スウェーデン福祉研究所を立ち上げる計画が持ち上がったのですが、その開設には準備期間を要しました。その準備期間中、1999年ですが、私は当時大使館の研修生をしていました。

研究所は2003年に本格的に活動を始めたのですが、そ

の際には研究所の所長を務めさせてもらっていました。2003年から2008年までの間でしたが、日本の介護福祉事業で先進的な取り組みをされている方々とも手を取り合って活動をしてきました。その時にも講演会やセミナーをおこなうために、かれこれ10回以上北海道を訪問しました。札幌にある禎心会という医療法人があるのですが、その際非常にお世話になりましたね。そういうネットワークの中で、スウェーデンの福祉用具や研修制度やケアの手法を日本に紹介していきました。

その中で「シルヴィア・ホーム」という、スウェーデンの王妃が会長を務めていらっしゃる認知症専門デイサービスと研修センターが注目を集めておりまして、その「シルヴィア・ホーム」で行われている研修制度の日本語版を作って、それを広めるために、年間を通して北海道から沖縄まで足を運んでスウェーデンからインストラクターを招いたりしながらセミナーを行っていました。



ドロットニングホルム宮殿近くに
あるシルヴィア・ホーム

そんなセミナーに毎回「やります！」と言って手を挙げて加わってくれたのが、私が今いる舞浜倶楽部だったんです。先に言ったようにスウェーデン福祉研究所は2003年に始まったのですが、この舞浜倶楽部も実は2003年に設立されたということで、はじめのころから共に歩んできたといっても過言ではないでしょう。

舞浜倶楽部の最初の1か所は、やはり地域の中で、専門的に認知症ケア、そして「看取りケア」。この2つはキーワードになるもので、介護現場にとって、複雑なものとなるのが認知症ケアと看取りケアなのですが、それを取ってやりました。



舞浜倶楽部・新浦安フォーラム中庭より

特に有料老人ホームでは、元気なお金持ちの高齢者の方を気楽に受け入れるという方針で失敗してしまった法人が沢山ありまして、福祉施設の経営は実際そんな甘いものではないですよ。最初は元気でも、徐々に衰えていくのが普通ですから、その衰えて元気な状態でいらなくなった時、複雑なケアが必要になった時の人格の尊厳を守ることが可能なのか、実現できるのか。このこと

への挑戦ですね。それを舞浜倶楽部と共にやってきました。

—非常に重要な取り組みですね。私個人としても非常に興味深いトピックです。実際にお取り組みを拝見してみたいものです。

そうですね、このコロナの事態が落ち着いたら是非一度お越しください！

—舞浜倶楽部様のお取り組みとして特徴的なものなどをお聞かせいただけますか？

そうですね、まず90年代から参考にしていく地域のケア、認知症ケア、看取りケア。これは今でもキーワードになっているものです。それを実現するための取り組みが重要になってきます。「これをやりたい」とか「理想的」というものではなく、実際にやらなければならないことです。そのために必要なものがありまして、まず研修が必要ですね。舞浜倶楽部の場合は社内に研修センターを設けています。スタッフに求められる知識というものは常に新しいものになっていきますので、それを学びながら習得していきます。それを地域の方々もお招きしたり、認知症ケアについて教えたりもしています。この研修センターに来ていただくことももちろんですが、こちらから伺って教えることもありまして、学校や行政機関、警察、消防署にももちろん伺います。日本が国として作った認知症サポーター養成講座というものがあまして、その方針に沿う形でやっています。

ということで、まずは知識が必要ですね。それを地域の皆さんと共に学んでいくと、地域のケアというものはじめて実際に実現できるものになります。

認知症に関して、認知症によって徘徊される方を探す訓練…この場合は模擬訓練もおこなっています。あとは、ご家族の方の個々に複雑な事情もあって、これまでは家族に認知症の人間がいることを隠してきたことが多かったんですね。でもこれは日本だけの話ではなく、殆どの国にあることです。認知症などの難しい病気に罹った人が身内にいるということを隠すということは誰にとっても良いことではないですよ、なのでそれを気楽に相談することができる優しく明るい雰囲気や地域の中と介護現場で作っていかなければならないですね。それは例えばカフェのような形であったりもします。スウェーデンにもありますね。日本は独自のスタイルではありますが、北海道にもありますし。今や日本全国で積極的におこなわれているものです。

ケアは老人ホームの中で始まるものではなく、基本的には在宅の状態、それぞれのお家にいる状態から始まるものです。ごく普通の日常生活が一番で、それは高齢者になっても、家でその日常生活をおくることができればそれが普通なのです。それが病気などの理由で不可能になってしまう時、初めてケアというものが入ってきます。それでも大概の場合は在宅でケアを行うのが始まりですので、在宅ケアというものももちろんやっています。デイサービスという形もありますし、小規模多機能型施設

での訪問ケアまたは来ていただいてケアをする形や、泊まっていただくなどの短期滞在でのケアもおこなっています。

日本では20年くらい前に劇的に変わったものとしては、個人個人のケアプランを作るようになったことが挙げられます。以前はみんな同じケアを受けるということが当たり前の状態でしたが、今や個々にケアプランを作ることが当たり前ものとなっています。その個々のケアプランを作る居宅支援の事業所もこちらでは用意しています。そうすることで地域の方の、在宅からのニーズをピックアップして、徐々にいろんなサービスを受けてもらえるようにしています。

舞浜倶楽部は有料老人ホームですので、お金はかかりますが、価格設定を二つに分けて、多くの方に入所してもらえるようにしています。入所した方には、入所後にどんな病気に罹ったとしても基本的に入院はせず、最期の看取りケアは舞浜倶楽部の中で受けられるようにしています。そうすることで、ケアが始まる在宅から看取りケアまで、全体を通して行えるようにしています。実際これを行うのは大変なことですが、スウェーデンでは早くから始まった地域ケアモデルなんです。日本ではこれを参考にして「地域包括ケア」と言っていますね。舞浜倶楽部ではこれを具体的な形で行っています。

タクティールケア/ブンネ・メソッド

スウェーデンを参考にしたものはもちろん他にもありまして、色々あるのですが、先ほどご説明したようなスウェーデンの研修制度や、スウェーデンの福祉用具もいくつか積極的に取り入れています。もう一つは、スウェーデンの施設を見学した際に、多くの場所で「タクティールケア」というものを見たんです。

—「タクティールケア」、ですか？

そうです、「触れる」という意味の単語に由来する「優しい、ふれあいのケア」なんです。今「タッチケア」という日本語で言われていますが、これを私たちが始めました。このケアを広めようと、2006年から日本で介護に関わる方を多く集めてセミナーなどを開催していますが、今や北海道から沖縄まで、受講生は12,000人以上います。—それほどとは！それだけ懸命に周知に尽力されたんですね！

この「タクティールケア」は非常に具体的で、特に認知症の方や医療的ケアを要する方に対して優しいケアなんです。これがまず一つ。高齢者施設として舞浜倶楽部が初めて日本で導入したものです。

もうひとつ舞浜倶楽部が初めて導入したものがあまして、スウェーデンの独自の楽器を使ったもので「ブ



相手の手を柔らかく、包むように「触れる」のがタクティールケアです。

ンネ・メソッド」というものを取り入れています。これは認知症ケアにおいて素晴らしいものですね。

—そうですね、実は今回のインタビューに先だって拝読させていただきました（書籍を見せながら）



プンネ・メソッドで用いられる楽器。う、一緒に手を叩くだけでなく、楽器も弾けてしまうというものです。その楽器は4種類ほどありまして、ギター・ベース・笛・チャイムとあるのですが、「プンネ・メソッド」の本の表紙に出ている楽器はギターですね、多くの方に好まれる楽器です。そこにプンネ・メソッドの研修を受けた人が一人でもいれば、その人がその演奏者たちの指揮者になって楽器を配り、どの順番で誰が何をするか指示を出して曲を作るのです。Youtubeでもプンネ・メソッドの動画があるので、ぜひ見てみてください。これは大ヒットして多くの介護施設などで取り入れられています。

—私個人としてもこの「プンネ・メソッド」にはとても興味を持っておりまして、このような形でその名を聞くことができるとは思ってもみませんでした。ぜひ本物を一度見てみたいですね！

とても嬉しいです！こちらにいらした際には一緒にやりましょう！

—ぜひともお願いします！先ほどのタクティールケアというものも興味深いもので、10年ほど前ですが、障がい者支援のケアの現場で似たようなことをしていたのを思い出しました。やはりその時から舞浜倶楽部様の先進的なお取り組みが広がっていたんですね。

いつかこれを持って行きますね（笑）

今後の展望

—舞浜倶楽部様の今後のお取り組みについてお聴きしてもよろしいでしょうか？

舞浜倶楽部は、千葉の浦安市内で実績を作って参りましたが、それをもっともっと拡げていきたいと思っています。舞浜倶楽部のケアのやり方ですとか…。それと、劇的に増やすことは考えていませんが、少し事業所も増やしていきたいと思っています。良いものを広めるという役割があるかなと思っていますので、ケアについては研修やセミナーで…今のコロナ禍の状況であっても今回Zoomなど使えば出来るものなので、こういったものを上手く使いながら多くの方と一緒にやっていきたいと思っ

ています。

—舞浜倶楽部様のお取り組みはどれも先進的で素晴らしいものばかりですので、機会があれば私もぜひ参加したいですね。

その時は声を掛けますよ！

ストランデル社長について

—ストランデル社長が日本に興味を持ったきっかけなどはございますか？

最初は剣道マニアでした（笑）、剣道ばかりやっていたので、最初に日本とスウェーデンを行き来する10年間は剣道をやりに来ていたんです。なので留学の時にお世話になったホストファミリーも、留学の仲介をしてくれる財団にお願いして剣道をやっていたらっしゃる家庭を用意してもらったんです。そのご一家はお父さんもお兄さんもお姉さんも皆剣道をやっていたらっしゃって。当時私は高校生で日本語は上手く話せなかったのですが、日本語は話せないけど剣道ばかりやっているとこの感じでしたね。

—スウェーデンにも剣道の道場などはあるのですか？

それほど多くはないのですがスウェーデンにもあります。今スウェーデンにはだいたい4,500人くらいの方が住んでいらっしゃいますが、その中には剣道をやっていたらっしゃる方もいて、そういう方たちとの出会いもありました。その人たちとは今でもつながりがあります。ですので、スウェーデンでの日本人とのつながりも剣道あつてのものですね。日本は剣道の本場ですから、行かなければいけないなど。日本で剣道をやっている方というのは皆かっこよかったんですね、皆強くて。そんな憧れもあって、最初の1年間はほぼ休みなく剣道に打ち込んでいました。

—すごい熱意ですね！

その後北海道東海大学に留学した時も剣道部がありましたので、そこで剣道をやっていました。これが日本に興味を持った大きなきっかけですね。そこから福祉の道に変わっていくわけですが、それも人との出会いがきっかけですね。

—今も剣道は続けていらっしゃるのですか？

今やったらぎっくり腰になってしまいますね（笑）本当はやりたいのですが…腰を傷めないように気をつけていますからね。でも嬉しいことが1つありまして、私の姉の子どもが私の剣道を見て剣道マニアになったことですね。彼も何度も日本に来て日本語を学び、剣道に打ち込んでいます。これも剣道がつなげた縁ですね。

—素晴らしい縁ですね！私がいた頃は空手の道場をよく見かけましたが、日本の文化がきっかけになってスウェーデンとのつながりが出来ているということは、日本人としてもとても嬉しく思います。

私がスウェーデンにいた頃…90年代、大学で日本語を学んでいるスウェーデンの学生の多くは剣道や合気道、空手といったものに興味を持っていました。私がストックホルム大学の東アジア学部で日本語を専攻していたこ

ろは 20 人くらいの学生がいて、やはり同じく剣道や合気道、空手などに対する興味・関心が高かったですね。ですが 10 年後 20 年後にストックホルム大学の日本語学科に行った時には、100 人を越える生徒が日本語を学んでいる。でも彼らが興味・関心を持っているものというのはアニメや漫画。変わりましたね！ちょっとショックを受けてしまいました（笑）。

—確かにそうですね（笑）ストックホルム大学の日本語学科の先生も、ここ 10 数年で日本語を学ぶ生徒の興味関心が変わったと仰っていました。

外交の世界の用語で「ソフトパワー」と言いますが、正しくこれは日本社会のソフトパワーですね。日本に対する憧れがあるということで、良いことではあると思います。

日本の若者に向けて

—最後に日本の若者に向けてメッセージをお願いします。

そうですね、いっぱいありますが…真面目なことを言いますと、今の若い人たちも含め、私たちの前の世代の方々は戦争を経験しています、社会が破壊されてしまうような状況を経験しているわけです。今の世代では、そんな社会が破壊されてしまうような状況があるかということ、環境問題がそれに当たるといいます。戦争と環境問題の間に私たちはいるように思いますが、今現在は新型コロナウイルスの問題はありますし、環境問題がすぐに

社会を破壊するような状況ではないのですが、この平穏平和な日常の中で何をするか、ということを考えてみてもらいたいなと思っています。今というのは非常に貴重な時代・時期だと思うので、今こそ何をするかということを考えてみてほしいなと思っています。

介護の現場にいと、80代90代の方はその生き方や姿など、いろんな形で教えてくれているんじゃないかと思うんです。彼らは私たちの想像が及ばない凄まじい経験をなさっていますし、私たちのためになりうるものです。この貴重で平和な日常の中で自分の役割を見つけること。80代90代の方は当時にそんなことを考えるなんて余裕はなかった。そして遠い将来に環境問題がいざ社会を破壊するような事態になってしまったら、自分の役割を見つけるなどということは困難になるでしょう。私たちにはそれが可能です。貴重な Possibility を掴んでほしいなと思っています。

—介護の現場に携わってきたストランデル社長のお言葉、とても重みのある大切なメッセージをいただきました。本日はどうもありがとうございました！



ブンネ・メソッドの創始者ステン・ブンネ氏と、Bunne Music AB 社長のアンデルス・モス氏が来日した際に。

舞浜倶楽部 関連講座と書籍の紹介

講座

タクティール® ケアセミナー | コース

主催：株式会社舞浜倶楽部 共催：株式会社日本スウェーデン福祉研究所

日時：2020年11月28日（土）～29日（日）（2日間）

9:30～17:00（受付開始 9:00 より）

会場：舞浜倶楽部 新浦安フォーラム（千葉県浦安市）

定員：15名

受講料：66,000円（税込）

お申込み・お問い合わせ：株式会社舞浜倶楽部

〒279-0023 千葉県浦安市高洲 1-2-1 Tel:047-304-2400(代) Fax:047-352-7302



書籍

楽器を使った楽しい認知症ケア

スウェーデンのブンネ・メソッド

編著：舞浜倶楽部、ブンネ・ジャパン

出版社：メディア・ケアプラス

B5判 / 並製 / 88 ページ / オールカラー / 定価 2,000+税